

「絹本著色足利義輝像」(真正極楽寺蔵)の修理について

安井 雅恵

1. はじめに

京都市左京区に所在する鈴聲山真正極楽寺は、真如堂の名で親しまれる天台宗の名刹である。同寺に伝来する「絹本著色足利義輝像」(以下「真如堂本」とする。図1)は、作者不詳ながら、桃山時代の土佐派による肖像画の基準的作例として、京都市有形文化財に指定されており¹⁾、後述するように、本紙料絹の横折や亀裂、絵具層の剥離など、経年による損傷が看過しがたい状態となったため、平成29年(2017)度に京都市文化財保護事業として修理が行われた。

小稿はその修理に関わる包括的な報告²⁾である。修理の事前・事後の経緯は、文化財の公開に携わる者には自明のことながら、文化財保護法改正³⁾を踏まえ、公開・活用へ向けて文化財保護のあり方が大きな転換点を迎えている現在、公開に至るまでの日常業務—事前に作品ごとの状態をつぶさに確認し、適切な保存・修理と公開方法を考える—を記録として残すことも必要と考え、敢えて綴ることとした。また、修理前後のデータ及び写真は文末にまとめて掲載した。

なお、小稿第4～6節の内容及び修理前後データ・掲載写真等は、全面的に株式会社光影堂の修理報告書⁴⁾に依拠し、構成・



図1 絹本著色足利義輝像(真正極楽寺蔵)
修理後本紙全図

文言等を小稿用に改めたものである。

2. 真如堂本の概要

真如堂本の像主、足利義輝(1536 - 1565)は室町幕府の十三代将軍である。十二代将軍足利義晴の嫡男として生まれ、弱体化した室町幕府の立て直しに努めたが、永禄8年(1565)5月19日、三好三人衆の軍勢に自邸を急襲され、応戦するも敵わず、30歳で壮絶な最期を遂げた。

真如堂本の義輝は、立烏帽子をかぶり、右が白地に緑の格子縞、左が段模様の片身替りの小袖の上に、夏物の朱色の直垂を着て、右手に中啓を握り、帯に腰刀を差して、上臍に坐す姿で描かれている。賛はなく、像主名も記されない。旧収納箱の蓋表には「東山殿御影」の墨書があり、一時期、義政像とされていたことを物語る⁵⁾。

真如堂本の像容は国立歴史民俗博物館蔵「足利義輝像」(以下「歴博本」とする)とほぼ同じである。歴博本には天正5年(1577)の策彦周良の賛があり、義輝十三回忌の供養像として土佐光吉が制作したものとされている。また、京都市立芸術大学蔵の土佐派絵画資料には「源式」(玄二) 銘のある義輝の紙形があり、これらとの比較から、真如堂本は土佐光吉周辺の絵師によって、歴博本と相前後する時期に制作されたと考えられている⁶⁾。

3. 修理に至る経緯

平成28年夏、京都文化博物館(以下「文博」とする)から、同年11月より開催され

る「戦国時代」展に真如堂本を出品するにあたり、応急修理を施したいという知らせがあった。京都市指定文化財は修理に際して届出が義務付けられており⁷⁾、作品の状態に応じて、展示担当者から連絡があることも多い。

これを受け、9月20日、真如堂本の状態確認のため、文博の展示担当者、応急修理を担当する光影堂とともに真如堂を訪れた。

当時の真如堂本は、応急修理を施せば、絵具が一時的に安定し、展示は可能な状態であった。しかし、横折れが全面にわたり、本紙料絹が表装や裏打紙から浮いている箇所が多数あるなど、損傷が進行しており、肌裏紙まですべて取り替える、本格的な解体修理の必要性があることも判明した。その場で所有者に現状を御確認いただき、展示はできても、作品に過度な負担は掛けたくないという共通認識が得られた。そこで、文博担当者の判断で、3館巡回(28年11月23日～29年1月29日江戸東京博物館、2月25日～4月16日文博、4月29日～6月18日米沢市上杉博物館)のうち、最も運搬の負担が少ない文博での単館展示とし、展示日数も2週間と決まった。

応急修理は28年10月25日から12月8日にかけて、京都国立博物館文化財保存修理所内にある光影堂の工房で行われた。この時の修理内容は、絵具の剥落止めと総裏からの折伏せ入れ・^{おれふ}発装(上軸)付け根の断裂の補修であった。

この間、所有者に御英断いただき、翌年度から本格修理に入ることが決定した。

4. 損傷状況

本格修理は、応急修理と同じく光影堂で行われた。

過去の修理記録は残っておらず、今回の修理でも修理銘等は発見されなかった。

真如堂本の損傷は、本紙の全体に生じた横折れ（図2）に起因するものが多かった。横折れがきついところでは、肌裏紙から本紙料絹が浮いてしまい、折れ山の頂点では亀裂に進行、料絹の欠失とともに、絵具の剥落を引き起こしている箇所があった。本紙が欠失して、裏彩色が露出している箇所も散見され、絵具はかなり不安定な状態であった。

上記の損傷が著しいところは直垂の右胸



図2 本紙の横折れ

から右袖にかけて（図3）と、上畳の左前部周辺（図4）であったが、顔にもV字様の掻き傷があった（図5）。透過光撮影写真（図6）を見れば明らかなように、この部分



図3 料絹の欠失と裏彩色の露出（袖）



図4 料絹の欠失と裏彩色の露出（畳縁）

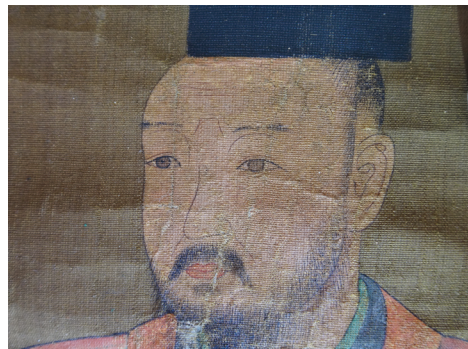


図5 顔面部の損傷

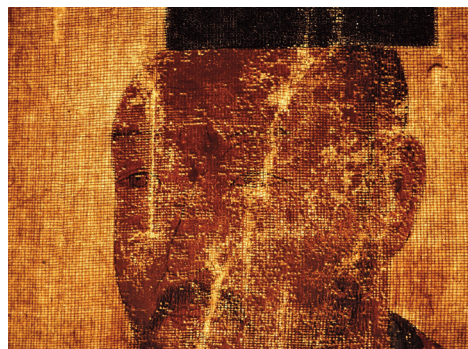


図6 顔面部（透過光撮影）

は裏彩色まで欠失していた。肌裏紙の色調が本紙と馴染んでいたため、さほど目立ちはしなかったが、残念なことに像主の印象を左右する目鼻や眉、口元といった重要な面貌表現を一部損ねていた。

本紙料絹は、歴博本と比較すると絹目が荒く、縦横方向ともに歪みが目立った(図7)。また、料絹の色もやや黒ずんでおり、経年の汚れと濃い茶色の肌裏紙が影響していると見られた。このため、彩色部分の色調も沈んで見えた。

裏彩色は確認されたが、透過光撮影写真からも明らかなように、一部が失われていた。過去の修理で肌裏紙を取り替えた際に裏彩色が剥落、この時に飛び散ったと見られる胡粉も確認できた(図8)。ただし肌裏紙の除去は直近の修理ではないようで、肌裏紙まで折れと亀裂が及んでいた。



図7 料絹の拡大



図8 胡粉の飛散

また、総裏紙を取り替えるだけの修理が行われた形跡があったが、表装裂の接着力も弱くなっており、本紙を支える役目を果たせなくなりつつあった。

5. 修理方針

まず、本紙を支えるため、劣化した肌裏紙は取り替える必要があったが、本紙表面の絵具層が不安定であることに加えて、裏彩色も表の彩色同様、危険な状態であった。かつ本紙料絹が欠失し、肌裏紙に残った裏彩色が露出している箇所もあった。このため、肌裏紙除去に際しては、本紙表面及び絵具層を保護するため、①絵具に適切な剥落止めを施す、②本紙が欠失して裏彩色が露出している箇所には表から補絹する、③表打を行うこととし、上記手順の後、乾式肌上法(少量の水を用いて部分的に湿らせた肌裏紙を少しずつ取り除く方式)で肌裏を除去することとした。

肌裏紙除去後は、接着力が弱まり剥落の危険がある裏彩色に剥落止めを施し、無地場(彩色等の表現がなされず、料絹が素地のまま残っている部分)で料絹が欠失している箇所に補絹を施すこととした。

表装は、所有者の意向も踏まえ、形式は旧状を踏襲しつつ、すべて新調することとした。今後も折れによる損傷が懸念されるので、桐太巻添軸を新調、これに伴い旧保存箱は使用できなくなるため、保存箱は二重箱で新調することとした。

6. 修理工程

(1) 写真撮影, 調査

修理前に本紙の現状を詳細に調査して、撮影、記録。顕微鏡で絹目や絵具を観察、倍率20倍で顕微鏡写真を撮影した。絵具層の接着強度を確認するため、絵具及び料絹のパッチテスト⁸⁾を行った。前述の損傷状況や修理方針は、修理前の調査結果に基づくものであり、極めて重要な作業である。

(2) 剥落止め, 解体

剥落の恐れがある絵具と料絹に、膠水溶液もしくはフノリ水溶液で剥落止めを施した。剥落止めには、防腐剤無添加で、柔軟性があり透明度が高い兎膠を使用した。剥落止めの後、本紙と表装裂地を解体した(図9)。



図9 解体



図10 剥落止め

(3) クリーニング, 仮裏打

柔らかい筆を用いて本紙表面に付着した埃等を払った。本紙に仮裏打を行った後、本紙表面から濾過水(繊維状活性炭フィルター及び中空糸フィルターで塩素及び鉄分を除去したもの)を噴霧、本紙の下に敷いた吸取紙に汚れを移動させた。過去の修理で施された折伏せを除去した。

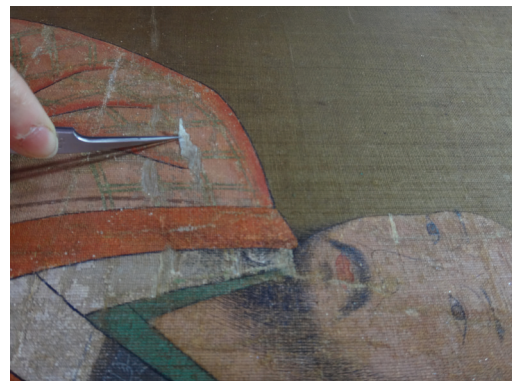


図11 表補絹

(4) 剥落止め(2回目)

実体顕微鏡を使用して絵具層を観察し、状態に合わせて1~2パーセントの濃度の膠水溶液を用いた(図10)。

(5) 表補絹

料絹が欠失し、裏彩色が露出している箇所に、表面から補絹を施した(図11)。補修絹は本紙の組成と同様の絹を電子線で劣化させ、本紙料絹より引きの強さを弱めた

ものを用いた。本紙料絹の色と合わせるため、天然植物染料(矢車附子)で染色した後、灰汁による媒染を行い、色味を定着させた。

(6) 表打

厚さが異なる2種のレーヨン紙と楮紙を用いて3層の表打を行った(図12)。用いたフノリは常温抽出したマフノリで、3種

類のフノリ科の中でも一番接着強度が高く、抽出成分に不純物が少ないとされる。常温抽出したフノリを用いるのは、煮出し抽出よりも常温抽出のほうが色味が少なく透明感があり、かつ水と馴染みやすいので、肌裏打後の表打の除去が容易で、不要なフノリを本紙表面に残存させないためである。その反面、接着力が弱く、表打が外れやすいため、通常24時間かけて抽出するところを48時間とし、一般的な常温抽出フノリよりも強い接着力を持たせた⁹⁾。

(7) 肌裏紙の除去

表打が乾燥した後、本紙裏面からわずかな水分を与えて少量ずつ肌裏紙を除去した(図13)。

(8) 裏彩色の剥落止め、裏面からの補絹

裏彩色の剥落止めを行った(図14)。料絹及び肌裏紙に対する裏彩色の接着は、それぞれ非常に甘く、複雑な浮き方をしていた。そのため剥落止めには特に注意を要した。また裏面から補修絹を用いて、無地場の補修を行った(図15)。

(9) 肌裏打

3層目と2層目の表打を除去し、肌裏打を行った(図16)。肌裏紙には、補修絹と同様の手法で染めた美濃紙を用いた。肌裏打の後、1層目の表打を除去した。



図12 表打



図13 肌裏紙の除去



図14 裏彩色の剥落止め

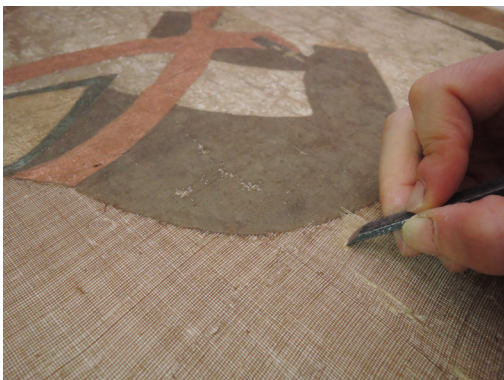


図15 裏面からの補絹



図16 肌裏打

(10) 増裏打

古糊を用い、美栖紙で増裏打を行った(図17)。

(11) 折伏せ、増裏打(2回目)

亀裂と折れが発生している箇所、今後発生する可能性が高い箇所に、細い帯状の楮紙で折伏せを施して補強した(図18)。2回目の増裏打を施し、板に仮張りし、本紙を平らな状態で安定させた。

(12) 補彩

仮張りで乾燥させた後、補彩を行った(図19)。補彩は本紙料絹の色を基準として、鑑賞を妨げないように配慮した。

(13) 表装裂地調整

所有者と協議のうえ、新たな表装裂地を決定した。表装裂地に矢車附子で古色を施してから、小麦澱粉糊を用いて美濃紙で肌裏打を行った。その後、美栖紙で増裏打を行い、本紙との厚さ、表具の腰を調整した。

(14) 付廻し

新調した表装裂地を本紙に付け廻した(図20)。

(15) 中裏打及び耳折

本紙が薄く、表装裂地とのバランスが悪かったことが折れの一因と考えられたため、中裏打では、やや厚めの美栖紙を本紙に、それより薄めのものを表装裂地に用い



図17 増裏打



図18 折伏せ



図19 補彩



図20 付廻し



図21 中裏打

て、厚みが均一になるよう調整した(図21)。

(16) 総裏打

古糊を用い、宇陀紙で総裏打を行った。

(17) 補彩(2回目)

仮張りして乾燥させた後、補彩を行った。

(18) 裏摺り、裏張り

裏面から裏摺りを行い(図22)、裏側を表にして仮張りし、1ヵ月以上乾燥させ、本紙を安定させた。

(19) 仕上げ

十分乾燥させた本紙を仮張りから取り外し、耳を漉き、発装、軸首を取り付けた。下軸、鐙、啄木を取り付け、表具の形に仕立てた(図23)。

(20) 納入

羽二重の包裂、桐太巻添軸、桐屋郎箱、桐漆塗台指外箱を新調し、修理完了の本紙を納入した。墨書のあった旧箱の蓋板は外箱の底に納入した(図24)。

7. 特記事項ー裏彩色について

裏彩色は比較的よく残っており、描法の確認ができた(図25)。



図25 上半身(裏彩色)

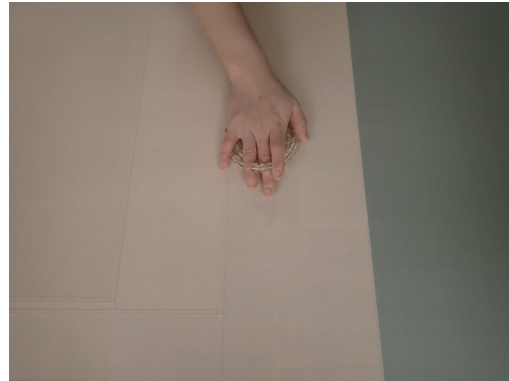


図22 裏摺り



図23 仕上げ



図24 保存箱



図26 直垂(表面)

着衣のうち、小袖は裏彩色で表し、上に重ね着する直垂は表から彩色しており、本紙料絹を挟んで、夏物の透けた質感が合理的かつ巧みに表現されていた(図26)。また、小袖の段模様や直垂の襟元などは、丁寧に塗り分けられていた。

腰刀の塗り分けは極めて繊細で、表面(図27)では目貫と合口、笄の縁と桐紋を金泥で、それ以外を墨で塗るのに応じて、裏彩色(図28)では金泥部分と笄は白系の絵具、それ以外は黒に塗り分けていた。

中啓(図29)の金彩は本紙料絹の裏面に金箔を施す、いわゆる裏箔の技法かと思われたが、裏面には目貫などと同じ白の絵具が塗られていた(図30)。擦れてしまっているため分かりづらくなっていたが、金箔は本紙の表面から押されていたと見られる(図31)。

8. 結びに代えて一竣工とその後

修理を終えた真如堂本は、平成30年3月14日、所有者のもとに納品された。

掛軸装など巻き解きする作品は、修理後1年間は「寝かせて」表具を馴染ませるのが通例となっている。真如堂では、毎年7



図27 腰刀(表面)



図28 腰刀(裏彩色)

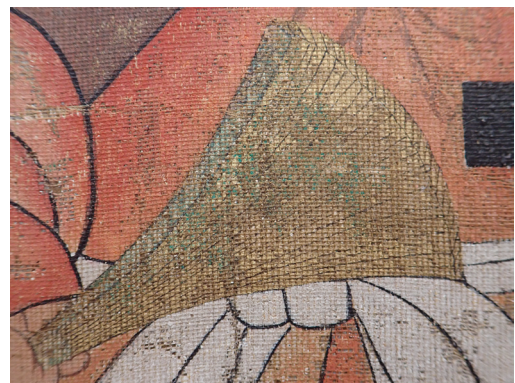


図29 中啓(表面)



図30 中啓(裏彩色)



図31 中啓(表面拡大)

月の曝涼で真如堂本を掛けておられるが、この年は見送ることとされた。

他方、4月中旬に、所有者のもとに堺市博物館から、「土佐光吉 戦国の世を生きたやまと絵師」展へ真如堂本を出品したいとの依頼があった。展示期間は平成30年10月6日から11月4日で、竣工から1年に満たない時期での要請であり、所有者から相談があった。そこで、修理技術者と意見交換をしたところ、修理期間中の12月末には裏張り（修理工程17）まで進んでおり、竣工までの3ヶ月近い期間、十分乾燥させているので、短期の展示なら問題ないという結論に至った。それでも、可能な限り展示時期を短く、かつ遅らせるのが妥当ということで、展示日程のうち後期2週間での出品を所有者に提案した。これを受けて所有者が出品を承諾され、10月23日から11月4日の13日間、真如堂本は歴博本と並んで展示されることとなった。展示期間中の10月26日には展示担当者とともに現状確認を行い、展覧会終了後、11月8日に所有者のもとへ無事返却された。

註

- 1) 平成5年（1993）4月1日指定。指定区分は美術工芸品（絵画）。
- 2) 本件修理によって得られた知見の一部については、拙稿「真正極楽寺蔵『足利義輝像』について」（堺市博物館編『土佐光吉 戦国の世を生きたやまと絵師』、2018年、74～75頁）において既に述べているが、本稿は修理全体

の報告を目的とするため、重複する内容が含まれている。

- 3) 平成31年4月1日施行。
- 4) 株式会社光影堂編『修理報告書 京都市指定文化財絹本著色足利義輝像（真正極楽寺蔵）』2018年。
- 5) 真如堂本は、昭和16年（1931）から開始された京都府寺院重宝調査で、赤松俊秀氏に見出だされた。赤松俊秀「足利氏の肖像に就いて」（『美術研究』152号、1949年、24～46頁）参照。同稿において、赤松氏は真如堂本を足利義教像と比定された。
- 6) 京都市文化財指定時の答申資料にもとづく。なお、真如堂本の位置付けに関しては前掲註2拙稿参照。
- 7) 補助金を受けての修理事業は、届出の対象外である。
- 8) 3ミリメートル角の吸い取り紙を湿らせて絵具の上に置き、色の移動を確認すると同時に、水に弱い絵具の箇所を把握する。
- 9) 光影堂沖本明子主任技師の御判断による。フノリの特性については、早川典子「コラム：文化財修理に用いられるフノリについて」（『TOBUNKEN NEWS（東文研ニュース）』48号、2012年、16～17頁）参照。

謝 辞

本報告執筆にあたり、所有者の真正極楽寺様をはじめ、株式会社光影堂には修理資料と写真の御提供を含め、多大なる御協力をいただいた。特に、本件修理御担当の沖本明子主任技師には、修理中から懇切な御説明、御教示を賜った。末筆ながら記して深甚の謝意を表します。

やすい まさえ
安井 雅恵（文化財保護課 主任（美術工芸品担当））

[参考資料] 修理前後データ及び写真

1 修理前後の作品データ

〔修理前〕

品質形状

形 状：掛軸装（二段仏表装）

中廻・風帯：白地桐文金襴

総 縁：藍地雲文綾

軸 首：頭切木軸

保 存 箱：桐屋郎箱

寸法（単位はcm）

本 紙	縦	93.6	横	40.3
表 装	縦	169.0	横	57.1
中 廻	上	11.5	下	5.7
総 縁	上	36.4	下	19.2
柱	巾	7.0		
軸 首	径	2.8		

〔修理後〕

品質形状

形 状：掛軸装（二段仏表装）

中廻・風帯：白茶地角龍文金襴

総 縁：藍地雲文綾

軸 首：黒檀頭切軸

保 存 箱：桐屋郎箱，桐漆塗台指
外箱及び桐太巻添軸

寸法

本 紙	縦	94.0	横	40.3
表 装	縦	174.8	横	57.8
中 廻	上	11.8	下	6.3
総 縁	上	40.8	下	21.1
柱	巾	7.0		
軸 首	径	2.9		

2 使用材料及び製作者

補修絹 電子線劣化絹（平織絹）

廣信織物（京都）

※電子線照射 日本原子力研究開発機
構高崎量子応用研究所

肌裏紙 薄美濃紙3匁

長谷川和紙工房（岐阜）

増裏紙 美栖紙 上窪良二（奈良）

中裏紙 美栖紙 上窪良二（奈良）

総裏紙 宇陀紙 福西和紙本舗（奈良）

折伏紙 薄美濃紙2.5匁

長谷川和紙工房（岐阜）

中廻・風帯 白茶地角龍文金襴

廣信織物（京都）

総 縁 藍地雲文綾 廣信織物（京都）

上巻絹 平織絹 廣信織物（京都）

軸 首 黒檀頭切軸 速水商店（京都）

保存箱 桐屋郎箱，桐漆塗台指外箱，桐太巻添
軸 黒田工房（京都）

3 修理前透過光撮影写真



4 肌裏紙除去後裏面写真



5 修理前後写真



修理前 全図



修理後 全図



修理前 本紙全図



修理後 本紙全図



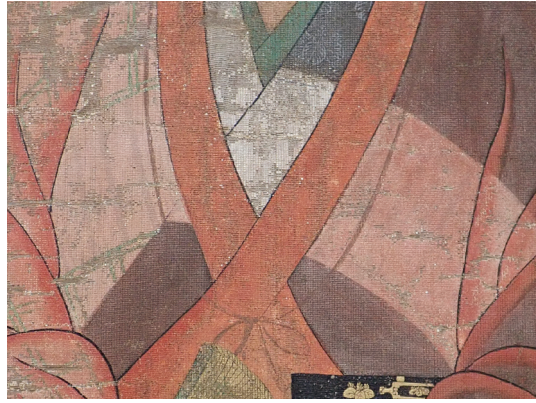
修理前 顔面部



修理後 顔面部



修理前 胸前



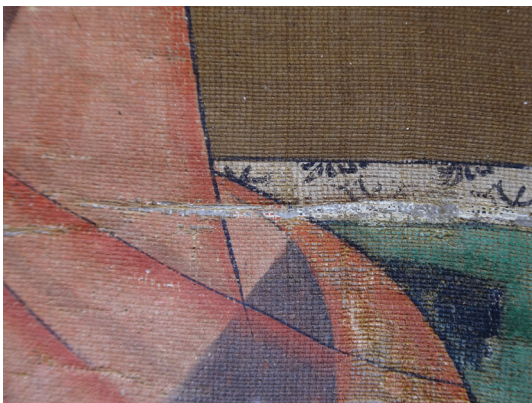
修理後 胸前



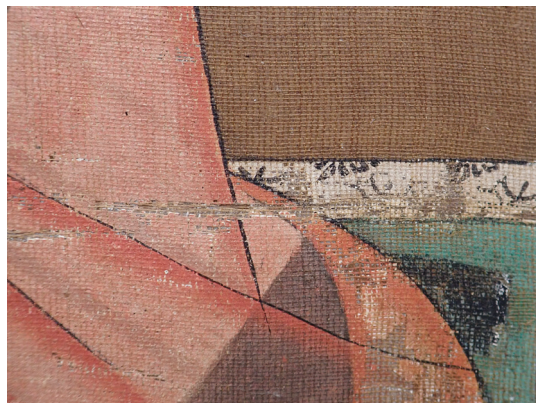
修理前 袖



修理後 袖



修理前 畳縁



修理後 畳縁

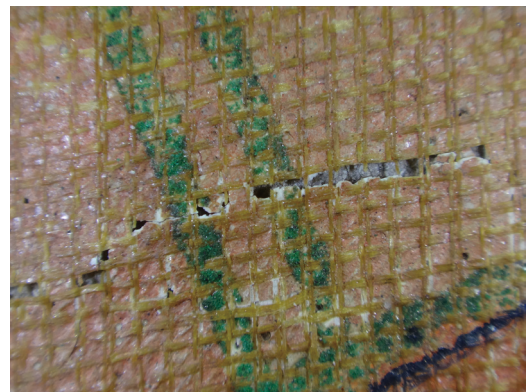
6 細部拡大写真



拡大箇所



1



2



3



4

7 裏彩色顕微鏡拡大写真(×20)



拡大箇所



1



2



3



4